

教務だより

2011年7月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

夏は「変わる」とき…。

茗溪塾塾長 宇野 雅春

震災後、初めての夏がやってきました。解決が長引く原発の影響もあり、節電のことなどを考えると、この夏は、どうなるのか？多少不安もよぎりますが、今は、日本全体で東北の復興を後押しすべき時、前向きに課題に取り組んでいくべき時と思っています。塾と復興は全く関係ない印象もありますが、夏期合宿での接点があります。いつも合宿中お世話になるホテルの従業員には、東北の方が沢山います。以前からどうして東北の人が多いのかと不思議に思っていました、冬場スキーで有名な志賀高原ですから、東北の人たちが冬場や夏の農閑期に働きに来ていてもおかしくありません。

今年は震災のためにスキー客3000人のキャンセルが相次いだそうで大きな打撃があったと聞いています。夏の合宿も風評被害を気にしていたようですが、今のところさすがに夏の学習への関心は高く、過去最高だった昨年に届かないまでも、例年並みの生徒の参加が見込まれています。空調なしですごせる高原という条件を考えると、生徒のためには非常に恵まれた空間といえます。快適な学習空間と集中できる場所、そして、通常では得られない勉強をめぐる大きな「気付き」を提供するべく先生方も必死の準備をしています。

今年の夏期講習や合宿のテーマは、「自分改造計画」「生活習慣をゲットする」です。塾が考える「夏」は受験に向けて前向きに自分を変えていくということです。長い夏休みを、塾としては生徒の学習の正念場と捉え、変わる！チャンスと考えています。でも、よく考えてみると実は、長い夏休みというのはむしろ良いことばかりではなく、「悪く変わる」ということも十分考えられるのです。非行に走ったり、問題行動を起こすのも夏場が一番多いと聞きます。今の子供に、どんな夏休みを経験させるのが一番良いのか？人それぞれで考えも異なり、意見が分かるところだと思えます。

30年位前には、塾が「キャンプ」を主催して、忙しい父母に代わって、遊びの場を提供したこともあります。その頃は、レジャーブームと言われましたが、家族旅行が今ほどさかんでいなかった頃です。今ですと、学校でも毎年宿泊型の行事が入りますし、海外旅行や国内旅行も非常にさかんで、塾が「遊び」を企画する意味は、全くなくなりました。

それと反対に、豊かでゆとりのある生活の中で失いつつある生徒の「気力」のようなもの、様々な「興味を引く」ツールにはまり、「勉強」を後景に押しやっているようなこと、これを何とかしなくてはならないと考えてしまいます。

受験を請け負う「塾」の必修課題として「子供を変える」ということからは避けて通れないということです。恵まれすぎた環境で、「別に特別努力しなくても生きていけるじゃん！」とまじめに思っている子供たちに、何かを気付かせなくてはならないということです。

子供達が「見失っている」自分の目標に気付かせ、一人一人が自分の今やるべきことをきちんとつかむこと。受験に向けて、乱れた生活習慣を立て直し、何よりも良い習慣を確立すること。学習も「習慣」になれば、苦痛はなくなります。

夏は、簡単に悪い習慣にもはまります。ものが溢れ設備が充実し、何不自由ない暮らしが保証されていると思込んでいる子供達に、今「就職難」という問題が降りかかっています。親達は必死で「子育て」をしています、子供達は、親の気持ちや苦勞をあまり分かっていません。今のくらしがそのまま続くと思っています。東日本大震災は、私達に、その意味での価値観の転換を迫ってきています。夏を怠惰に終わらせ、悪い習慣に飲み込まれるのか、前向きに自分を鍛えるのか？そんなことを考えてみるとやはり「夏」は前向きに将来を考えて取り組むべき時のように思えます。塾にとっても正念場です。